巻頭言

ガラパゴス化からグローバル市場へ…企業技術者への期待

小江紘司 Koji OE
DIC株式会社　代表取締役会長

「持続的発展」がキーワードとなっているが、日本の産業にとり、高いハードルの一つが人口の減少による総需要の縮小であり、すでに、汎用工業製品の多くが発展途上国にシフトし、国内市場での活路を機能性の付与に求める傾向がある。時に、狭い市場で多数の会社が機能の競争を繰り広げ、日本独自の市場を形成してしまう。市場参入障壁とはなるが、製品サイクルは短くなりさらに高機能化に奔走せざるを得ず、技術コストの増加と製品のガラパゴス化が起こる危惧がある。新需要創出による内需拡大はもとより、我が国産業にとり、競争で磨いた技術を海外市場でのビジネス拡大と付随する技術ロイヤリティで利益還流を図ることが、重要施策と考える。

欧米市場への展開に加えて、大人口国が発展過程にある今、グローバル市場でのビジネス展開は、ボリュームゾーンでのビジネスが鍵となる。日本品質は、ボリュームゾーンの要求特性とは隔たりがある場合が多く、特に、機能製品、組成品などでは、その対応が我が国産業の直面する課題である。技術者には、高機能化競争が生んだ製品への自負と入社以来品質向上を常としてきた経緯から機能変化（低下？）は不本意で、恐怖も感じるであろう。しかし、製品は機能を構成する数多くの技術の集積であり、技術の歴史の産物である。保有する技術を駆使して、市場ニーズを満たす製品設計をし、企業価値の向上を図ることは企業技術者の本質である。

各国が参入機会を求めている市場であり、満足すべき成果を得るにはスピーディな開発が必要である。その際、日本品質のフォーミュラから原料置換、機能などの引き算に走りがちであるが成功率は決して高くない。プリミティブな製品に対して高品質化への技術を適用して市場要求を満たす品質設計を行う、いわゆる、足し算の手法で開発を行うべきである。

技術は高い所から低きに流れ、低い所の技術は向上する。早晩、途上国はいくつかの過程をスキップして、技術競争に鎬（しのぎ）を削る相手となる。日本製品の戦後のグローバル市場における位置づけの変遷を見ればうなずけるであろう。社会的背景の違い、情報化の進展で異なる面を持つが、総じて、途上国も同様な歴史をたどると思われ、グローバル市場への対応は我が国産業の戦後の歴史の中に、その解を見いだせる気がする。

したがって、技術的優位性の継続が必要であるが、仕様の高度化と技術の進歩で、学問領域や専攻の境界は不明確となり、パラダイムシフトをもたらす革新的技術を生む土壌は形成されている。産官学の連携を軸に水平、垂直なオープンイノベーションを展開し、革新的技術を積み上げ、グローバル市場へのフレキシブルな応用で知的財産と世界標準化を主導し、創造技術立国を実現することが我が国の持続的発展の基盤となると考える。

© 2009 The Chemical Society of Japan